

海外における日本近世文学の書誌学的 および文献学的な研究の可能性

—実態の困難さとそれを乗り越えるために—

Laura Moretti

はじめに

あらゆる面でのグローバル化を目指している今の時代の中に、「海外から見た日本文学の研究—内と外をのりこえて—」というテーマの今回の第29回国際日本文学研究集会は決して偶然だとは思えない。背景としては国際交流を種々の形で進めている学界があり、eラーニングを重要とする大学もあれば、国際的なネットワークを構築して共同研究を重視する機関もあり、所蔵資料のデジタル化を通してその資料を世界中からアクセスできるような形にする図書館もあれば、情報検索が速やかに出来るデータベースを公開する機関もある。このような実態を背景にして、国文学研究資料館が長年積極的な役割を果たしてきた。その活用や成果があまりにも多くて一覧にしかねるが、近年の主な業績だけでも思い出してみると、HPに公開されている貴重なデータベース、安永尚志氏の日本文学国際共同研究プロジェクト^①、伊藤鉄也氏の特別共同利用研究員成果・報告^②、外国に行なわれる数々の古典籍調査^③などが挙げられる。日本文学研究をどのようにグローバル化の時代に対応・活性化させるか。どのような方針を立てて、今まで以上に国内の文学研究者のニーズと共に海外の研究者のニーズにも対応できるか。どのような形で日本文学の魅力を海外にアピールし、それによって国内にも日本の伝統への興味を蘇らせるか。国文学研究資料館の使命とも深く関わると思われる以上の検討こそが今回の研究集会のテーマを導いたのではなかろうか。

今集会のテーマの以上のような解釈によって、筆者が意識的に研究発表というよりも、研究の方法・手順に関する発表にする事にした。近年の研究又は進行中の研究（両方とも近世文学の領域における）の実例に基づきながら、海外における日本文学研究の諸問題を取り上げ、それらを乗り越えるための方法を提案してみたい。最終的な目的としては海外と日本国内の日本文学研究の統合の実現への貢献を考えており、自分の経験に基づいた考察は国文学研究資料館の国際的な活躍に少しでも役立てるものであればありがたい。このような希望は本稿の根底にあるものである。

1. 原資料の使用

ジェンダー・スタディーズなどのような理論上の枠組みが未だ強い影響を及ぼし、文学作品の分析を導く傾向が続いているにもかかわらず、文学理論においては新たな動きが見えるようになった。一方ではdistant reading（遠くからの解説、「精読」の反対）という方法によって限ったカノン（典型的な作品群）に拘らずある時代の文学作品の全体をマッピングするやり方が提案され、^④他方では作品ごとの詳細な分析への呼掛けが段々強まってきた。^⑤一見にこの二つの方法が対立しているようにみえるかもしれないが、両方とも同じ点に焦点をあわせていると考えられる。それは、前持って挙げられた理論を無理やりに作品に適用せずに、作品自体を重視して、様々な観点から見えてくる、その作品の本質を探る事である。その作品の書物としてのアイデンティティ（書誌学的な研究）、その作品の諸本とそれらに伴う作品の普及史と受容史（文献学的な研究）、その作品の内容の理解（翻刻・注釈）、その内容の解釈というのは主な段階だと考えられる。日本文学研究の場合には、以上のアプローチが日本国内では常に行なわれてきていると思われるが、海外ではまだ稀だと判断できるだろう。が、文学理論の態度が変わるにつれて、海外における日本文学研究においても作品中心研究が段々重んじられるようになると予想できる。特に大多数の作品が翻刻さえされていない状態である近世文学の場合には、作品中心研究の

必要性がより強かろう。

筆者もこのような作品中心研究が不可欠であると考えているが、そこで一番最初の問題に出合ってしまう。それは原本を手に入れる事とその使用である。

日本国内における多数の文庫は、多くの人々の長年の努力と共に、今も続いている国文学研究資料館の調査によって益々整理されるようになった。所蔵機関のそれぞれの目録をベースにして、総合目録も構築され、今の所では作品を見いだすには利用者が様々な参考文献を使用することができる。周知の通り、冊子として刊行された『国書総目録』、国文学研究資料館が公開している『国書基本データベース』と『古典籍総合目録』、国立情報学研究所が公開している『NACSIS Webcat』はその主な参考文献である。しかし海外における研究者にとっては、以上の文献自体の利用にも限界がある。例えば冊子の『国書総目録』を一冊も持っていないイタリアの状況を考えると、ネット上に公開されている目録に頼っているが、データの不足によって効果的な検索が難しい。『国書基本データベース』における所蔵機関の記録の欠乏と刊行年による資料の識別の省略や『古典籍総合目録』と『NACSIS Webcat』における基準の統一しない書誌記述は主な問題点であり、この問題点によって研究対象となっている作品を探す無理なケースもある。

海外における文庫になると、さらに困難な状態と対面せざるをえない。まず日本古典籍を集めている文庫の数々は未整理であることが目立つ。コーニッキ一版の『欧州所在日本古典籍総合目録』も、国文学研究資料館が進めている調査の結果も貴重な道具ではあるが、全体の文庫がカバーできるような目的からはまだ遠い。さらに整理完成の文庫の場合にさえ、問題が生じないとは言えない。イタリアの手短な実態を考える事にしてみると、まず整理された文庫であるにもかかわらずアクセス可能な形にしてくれない機関が挙げられ、それからアクセスできるような機関の場合にも様々な問題が残っているという事も挙げられる。それは主に目録の書誌データの誤りと不足である。その誤りは決して書誌調査を行う研究者や書誌学者の何かの責任によるのではなく、それよりも

調査期間の限定・制限と参考文献の不足に他ならないと考えられる。ローマサレジオ大学に所蔵されているマレガ文庫の極端な実例を出しながらこの点を考えていきたいと思う。

マレガ文庫における前期草双紙の調査にあたって、請求番号MM350の作品を取り上げる事にした^⑥。表紙の書き題簽には「^{きじのこま}鴟鴞 藤戸魁 鳥居清満画 三冊」とあるし、それに巻頭題がないため、目録^⑦には題簽通りに記録されている。よって標題が『鴟鴞藤戸魁』となり、責任表示が「丈阿著 鳥居清満画」となっている。翻刻・注釈・翻訳の仕事に手を付ける以前、まず一番最初に書誌記録を書こうとしていた際、イタリアにもアクセスできる『国書基本データベース』を引いてみたが、そこで食い違いが現れてきた。『鴟鴞藤戸魁』（WORK 148765）は三巻に構成されているとある。二巻のマレガ文庫本との相違の原因を追求するしかなくて、そこでまず役に立てるのは柱題である。マレガ文庫本には「ふちともんど」とあるが、『国書基本データベース』には柱題が多く記録されていないため早速の比較は不可能であった。そこで国文学研究資料館のマイクロ資料目録・和古書目録のデータベースも引いてみたら、偶然に『鴟鴞藤戸魁』があって、その柱題が「さきかけ」だと記録されていた。従ってマレガ文庫本が『鴟鴞藤戸魁』ではない可能性が非常に高いと確認できた。そこで今度「ふちともんど」という柱題で探してみたが、ネット上の参考文献の全てではその検索が出来ない状態であった。よって、木村八重子編の『赤本黒本青本版心索引』（1997年刊行）を引く必要が出てきたが、NACSIS Webcatで確認できるようにヨーロッパには一冊もない。そこで日本に住んでいる友達の援助をもらって、『赤本黒本青本版心索引』で確認してもらって、やっと『藤戸問答』（WORK 1664546）という作品にあたると分かった。今度諸本を確認するのになって、又さらに個人的な繋がりによって東京大学附属図書館本『藤戸問答』（請求番号E24/747）と東洋文庫本『板新鴟鴞藤戸魁』（請求番号三・Faと・イ2-8）のコピーを送ってもらう事ができた（両方の機関とも国際複写サービスは行っていない）。その段階ではやっとマレガ文

庫本が目録通りの『鴟鴞藤戸魁』ではなく、『藤戸問答』であると確認でき、本文の作業に入る事ができた。ご理解いただけるように、日本にいれば二日で済ませるような仕事が、二週間以上かかったし、もし個人的な繋がりがなくて海外の研究者に提供されているサービスのみを使うのであれば、恐らく書誌学上の上述の確認は未だできなかったかもしれない。勿論以上の不足による困難さが研究のみに影響を及ぼしているのではなく、目録作成自体にも深く影響を及ぼしていると考えている。

以上の経験は一例に過ぎないが、マレガ文庫の筆者による資料の新発見に伴った再調査の作業の際に改めて感じた現象である。すなわち参考文献が足りないため、書誌データの確認を日本でせねばならぬが、日本では参考文献があっても、今度は原資料はない。千点を超える文庫の場合には全資料の全文の写真を撮るのが不可能だし、それと共に外国で行なう調査の限られた時間には日本から必要な参考文献のコピーなどを送ってもらう事も不可能である。と認めると、他の解決を考えざるをえないことになる。その解決は四つの点に結ばれると、筆者は考えている。

一つ目は書誌的な研究のための参考文献のネット上の公開（最低限CDRomの発売）である。著作権の処理が問題になるだろうが、長い目で見てみると、書誌情報を網羅的に載せる古典籍総合目録や他の基本的な資料（例えば『近世書林板元總覧』や様々な蔵書印のデータなど）をデジタルの形で作成する事は不可欠であろう。今の時代ならネット上の公開によってどんな機関で調査をしてもその場で必要な文献がみられ、調査を行なっている段階で書誌情報を正確に確認できる事になる。

二つ目の点は古典籍総合目録を構築する上では書誌記述基準の統一が欠かせない事だと考えられる^⑧。その統一が実現されない限り、検討の対象となっていない作品と手に入れない他の原本との比較は、全く進められないということになる。図書館情報学者と書誌学者と国文学研究者の共通の基盤を作って、ローカル・ルールを超える普遍的な規則を決めて、調査にあたって、その規則を守っ

てカードを取れば、統一された書誌情報を提供する古典籍総合目録が実現できるだろう。

三つ目の点は調査期間とそのスピードと関係しているが、今のように日本在住者のみが世界中に派遣され、調査の担当者になるのだと、海外の文庫整理のペースがどうしても遅いままであろう。そこで考えられるのは、外国人の日本文学の研究者を育成して、書誌調査が自分のできるような外国人協力者を育てていく事である。これによって世界の日本古典籍文庫の整理もより速やかに進むと想像できるだろう。このように外国の文庫の整理を素早く仕上げるのは、勿論外国における研究者のみにとって有利な結果をもたらすのではなく、日本における研究者にとってもプラスになるだろう。

四つ目の点は原本のデジタル化の増加である。著作権とコストの問題が確かに悩ましいが、原本のデジタル化こそが海外における日本文学研究にとっては不可欠である。文庫調査の際に他の原本との比較は同版・後印本・かぶせばりなどの認識にあたって必要であり、ネット上では或る程度多くの原本が見られる状態になれば書誌記述の正確さもより保守されるだろう。今年の9月に開催された日本資料専門家欧州協会の学会で確かめた情報であるが、東京大学の霞亭文庫と京都大学貴重書部のデジタル化は両方とも進行中に中止された。霞亭文庫の場合には、海外からのリクエストがあれば何とか再開できるかもわからないと説明されたので、そろそろ海外の研究者がこのようなニーズがあると強く要求する必要があると思う。が、最大な希望は、全国の資料のマイクロ化を進んできたし、進んでいる国文学研究資料館にあらう。

原本のデジタル化は書誌調査のみと関連しているのではなく、海外における研究者の書誌学的な研究と文献学的な研究を実現するためにも欠かせない事である。何よりも、自由に来日できない時期には研究が止まらないように海外にいながら原本を写真でアクセスできるのは肝要である。しかし、言うまでもない事だが、骨を折って原本が残っているあらゆる文庫を廻って、諸本を自分の目で確かめるのは今までのようにこれからも近世文学の領域における研究の必

須の段階である。実物を自分の目で確かめる事によって新たな発見がそこにあるからである。例えば、筆者が『竹斎』の諸本の調査にあたって、複製版を通して天理図書館の写本と種々の版本との関連に関してはある仮説を立ててみたが^⑨、原本と特にその原本も含めている「国籍類書」の全体を検討するによって再考する余地が充分あると確認でき、近いうちに改めて日本で発表したいと思う。

以上の手段を実現できればできるほど、国内の「内」と海外の「外」の間に存在している空間的な距離を短縮する事ができ、海外の研究者もある程度日本に居るように（恐らくバーチャル日本になるが）、国内の研究者と似たような環境で研究を進める立場になるだろう。

2. 作品本文紹介

原本の取得を乗り越えた段階では、今度作品の本文を紹介することになる。この点に関しても日本国内の方法と海外の方法が異なる。近世文学の領域に限りて考察してみると、前者の場合には図書館の棚に眠っている作品を主として翻刻と注釈を通して次々と紹介することに勤めるのに対して、海外の場合には有名な作品の翻訳に主力が置かれている。今の所ではハルオ・シラネ氏のアンソロジー^⑩と共に、極少数の作品の翻訳が出版されている。一番最初はカノンの中に認められている作品を翻訳する必要があるのはいうまでもないことではあるが、これによって海外の読者にアクセスできる近世文学の作品が限られているし、それに正直言って海外の研究者の努力は日本人の学界においてはわずかの評価しか得られないままである。日本人が既に紹介した本文をさらに紹介する、第二段階の作業になるからである。そこで日本国内研究者の仕方と海外研究者の仕方を融和させるための方法を考え、実際に試しているところである。

最終的な目的は、原文付の翻訳をはるかに超える新しいスタイルの書物であり、ダブル・ブックと呼べるような書物である。今進めているプロジェクトのために四つの未翻刻の黄表紙を選んだ。東京都立中央図書館に所蔵されている

岸田杜芳作・北尾政演画『市川三升円』（天明2年伊勢治刊）、芝全交作・北尾政演画『芝全交智恵之程』（天明7年鳶屋刊）、築地善交作・北尾重政画『竹斎老宝山吹色』（寛政6年鶴屋刊）、壁前亭九年坊作・鳥高斎栄昌画『即席御療治』（寛政10年宝屋刊）である。それらの共通点は、主人公が藪医者である事と、荒唐無稽な治療が描かれている事である。勿論カノンに含められない作品ではあるが、このモチーフを選んだ理由は、近世初期の文学の代表的な作品『竹斎』から生まれた文学系譜に属する作品だからである。全体の系譜を研究するプロジェクトの中の一つの段階であり、文学系譜を好む近世文学の本質をより深く理解する上では意味のある仕事だと思う。

以上の四つの黄表紙を紹介する本は、二つの独立した部分で構成されている。一つは本の右から左に向かって捲る、日本人向けの日本語の部分であり、それぞれの作品の複製、翻刻、注釈を行う（図1参照）。翻刻は通読の便を考慮し



図1 ©Laura Moretti 2007年発行予定 Venezia, Cafosc

て、丸仮名表記で書かれた原文を漢字仮名混じりの本文に改める。注釈は本文を理解する上で不可欠な情報を提供し、取分け当時の資料の本文や図絵などを通して江戸時代の風俗の紹介と江戸文学の特徴的な駄洒落の説明などに焦点を合わせる。日本語の部分に添える解説は、以上の四つの黄表紙をベースにして、医学や薬学と関係している黄表紙を検討し、特にそこに認められる滑稽のメカニズムを分析する。もう一つの部分は左から右に向かって捲る、イタリア人向けのイタリア語の部分であり、それぞれの作品の翻訳と注釈を行う(図2参照)。絵と本文が相補的な関係を持つという黄表紙の特徴を重視するために、イタリア語訳は原本の写真の中に日本語の代わりに入れられる。注釈は日本語のと異なる基準に基づき、日本の文化に馴染みの薄いイタリア人の読者に特に必要となる知識も丁寧に提供する事に努める。イタリア語の部分における解説は、



Figura 1 Shobun zasshi kyōka wasse

図2 ©Laura Moretti 2007年発行予定 Venezia, Cafosc

まだ西洋で紹介されていない黄表紙の文学史も含める。

以上によって、日本語の部分とイタリア語の部分は異なる発想で作られている事が明らかだろうし、必ずしも同じ情報のみを提供する部分ではないということも明白だろう。いわゆる、同時にイタリア人の読者と日本人の読者に語ることを可能にするダブル・ブックであり、日本国内研究者の本文の扱い方と海外研究者の扱い方を同時に働かせ、その両方の扱い方の利点を同時に得られるダブル・ブックになるのを目指している。

以上の新しいやり方が少しでも広まれば、外国人の読者にカノン内とカノン外の作品を紹介しながら、日本国内に進んでいる研究活動にも積極的に参加できるとなるだろう。いわゆる、文学研究の土台である作品に対する異なるアプローチを同時に且つ有効に動かし、国内の「内」と海外の「外」の間に存在している知的な距離を乗り越える第一歩をすることができるだろう。

3. 本文分析や文学研究

本文紹介をさらに超える段階である本文分析や純粋な文学研究になると、近世文学の場合には少数の例外を除けば国内研究と海外研究の仕方が対立していると言えるほど異なる。国内研究は主として実証的であり、諸本研究や典拠研究が盛んに行っている。他方海外における研究は抽象的な文学理論に拘り、文学理論に基づいた枠を、取り上げている作品に当て嵌める傾向が強い。繰り返しになるが、以上の研究法が平行して行われ、接近して横断する事は稀であり、強いて言えばこのような対立が実際に存在しているため、この二つの研究法のお互いの批判も少なからずある。相手の弱点を強調して批判する代わりに、相手の方法の利点を発見してそれらの適用によって自分の方法を改善する事の方がはるかに有利だと考えられないだろうか。このような信念を持って、自分の研究にあたって上述の研究法の中間の仕方を適用しようとしている。時間が許すかぎり、近世文学研究における実例を少しでも検討してみたいと思う。

一つの例は近世文学の特徴であるテキスト相互関連性と関連している。鈴木

健一氏^⑪が述べるように昭和四十年代から典拠研究が広く進められているが、「その作品が典拠をどういう形で超克し自己の世界を作り得たかが、語られていなくてはならないはず」である。いわゆる或る作品がどのような典拠を使って、どのようなメカニズムでその典拠を保ったり変えたりして、新しい文学を生み出しているかという検討こそが必要である。このような検討にあたって、西洋理論でジェラルド・ジュネットの『パランプセスト』まで遡る intertextuality に関する研究の長い伝統の成果を使うのは非常に効果的である。何故かという、この理論から生まれた成果を使って、先駆作品の使用とそれと伴う文学的な意義を感情的にはなく、客観的に分析し、異なる種類を識別できるからである。筆者が前述の『竹斎』に関してはこのような方法を使ったうえで、『伊勢物語』の引用やそのパロディのみならず、それらを超える、種々の先駆文学（個々の作品のプロット、個々の作品の部分、伝統的な文体など）を種々のメカニズム（引用、もじり、転移など）によって換骨奪胎するモザイクであると確認できた（図3参照^⑫）。さらに『竹斎』から生まれた文学系譜を探って、明治までの変貌を通して『竹斎』の文学的な運命を辿ってきた^⑬。テキスト相互連関性へのこだわりはこの作品に限られているわけではなく、むしろ江戸文学の大事な特徴であるのは周知の通りである。ただしその方法と意味は時期によって、ジャンルによって、作品によって変わる（何でもパロディだというのは有限の、無益な言い方に過ぎない）。個々の作品を分析する際相応しい理論を適用すれば、その方法とその意味の相違が始めて見えてくるだろうし、それによって近世文学におけるテキスト相互連関性の歴史も構築できるだろう。

もう一つの例は鈴木健一氏が述べる「文学史の可能性」と関連している。始まった所の野心的なプロジェクトであるが、近世初期の散文学の再考を進めるプロジェクトを考えている。深沢秋男氏^⑭が述べるように「仮名草子という名称に対する検討や批判もあり、作品群の分類に関しても様々な意見が提出されて」いるのは現状である。深沢氏も紹介する中尾佐助氏の『分類の発想』^⑮

パート ①	京都の見物	北野における男色の話	恋文の文体のパロディ	文体の特徴の過度の使用
		黒谷における男色の話	『恨之助』プロットの換骨奪胎	その中に以下のメカニズム ①異性愛→同性愛 ②観音→薬師 ③末尾の変化（ミザナビームの挿入）
パート ②	京都から名古屋への旅	道行文の文体のパロディ		
パート ③	治療の嘶	掛詞と掛詞に添うイメージの不一致（伝統的な掛詞＋俗の領域におけるイメージ）		
パート ④	名古屋から江戸への旅	道行文の文体のパロディ	①『伊勢物語』九段の換骨奪胎	あ）題名引用 い）和歌引用 う）滑稽な転倒
			②狂歌の挿入	
パート ⑤	江戸の見物	『伊勢物語』九段		
		八橋の和歌のもじり		

図3 ©整版本『竹斎』におけるテキスト相互連関性

に論じられているやり方に近いが、国文学が伝統的に重視してきた枚挙と網羅のコンセプトを常に実現しながら、水平思考の思考法をも応用する事を目指している。言い換えれば、先ず近世初期の散文文学を網羅的に見渡して、全ての作品を検討するが、それと同時に文学ジャンルに関する理論を応用して今まで行われてきた理論や枠にとらわれずに、異なった角度から再考するのを目指している。長年に渡ると予想できるこのような研究プロジェクトは作品分析を常に基礎にして、分類の基準の設定、近世初期の文学と非文学の意識存在の検討、当時のジャンル意識、現代の文学ジャンルの定義、その種類と古典への適用性、特にジャンルが横断的に繋がっている可能性^⑮などを検討する事になろう。日

本の国文学の研究法と海外の研究法を共用して、近世初期の散文文学の再考が行なったら文学史における新しい現象は見えてくるのだろうか。回答は研究プロジェクトの成果が見えてきた時に延期させていただきたい。

ここに至ってもっともな疑問が浮かび上がるのだろうか、西洋文学を研究するために考え出されたツールを異なるコンテストで発展してきた日本文学（特に西洋とは無縁の近世文学）に適用するのは相応しいだろうか。文学が人間の表現の一つであると認識する上では、それは相応しいと考えられる。但し気を配っておかなければならぬは、まず検討対象の作品自体が許す程度では西洋理論のツールを使う事と、もう一つは西洋文学の基準で他の文学を評価しない事である。勿論文学理論の中には、日本文学に適用しにくい理論もあれば適用しやすい理論もあるが、後者の中に例えばナラトロジーが挙げられる。ナラトロジーは語りの形式や語り手の問題や視点などを検討するには欠かせないツールであろう。

上述の中間的な研究法を使ってみるのならば、国内の国文学の伝統的な仕方しか見せてくれない点と海外の仕方によってしか解釈できない点も同時に見えてくるだろう。本文紹介の場合にも見てきたように、これで「内」と「外」の間における知的な距離を乗り越える事になるだろう。

終わりに

以上は海外に行なう近世文学研究に関する主な問題点とフィールドワークによって見えてくる解決の可能性を論じた。原本の使用と関わる第一章に関しては国文学研究資料館の努力が待ち望まれるが、第二章の本文紹介と第三章の本文分析に関しては全ての研究者の協力が肝要であろう。日本文学（国文学）という「壁の内側」の研究対象を選んでも、「壁を超越した」方法でその研究を進める事は、本物の国際化を求める事だと思う。言うまでもなく研究対象や発表の場によって、「壁を超越した」研究法は様々な調節で整え、簡単に適用できるケースもあれば無理なケースもあるだろう。しかしこのような研究法が

段々広がって、新しい観点から日本文学を検討するようになれば、国内研究者も海外研究者も同じレベルで仕事しながら新たな発見をそこに見つけることになるだろう。この方法が比較文学や対比研究以上に正確な成果を持たせると信じて本発表を終わらせていただきたい。

【注】

- ①2001年～2005年の五年間の科学研究費基盤研究（S）であり、筆者も含めてイタリア人の研究者と深く結んだ研究プロジェクトである。HP “<http://www.nijl.ac.jp/~kiban-s/>” でその成果が閲覧できるが、毎年刊行の研究報告に載せられる研究発表、日本文学・日本学データベースや2005年9月にイタリアのフィレンツェで行なわれた学会は特に強調したい。
- ②HPに公開されている「『源氏物語』古注釈データベース」と共に、海外研究者の活躍を紹介する「海外における平安文学」、「スペイン語圏における日本文学」、「海外における日本文学研究論文1」などの冊子目録も出版されている。
- ③筆者が2001年と2004年の間ローマサレジオ大学マレガ文庫、ヴェネツィア東洋美術館とジェノヴァキョッソネ美術館の調査に参加させていただいた。
- ④Franco Moretti, *Graphs, Maps, Trees. Abstract Models for a Literary History*, Verso, New York 2005.
- ⑤特にヨーロッパの中ではこのような傾向が強まり、例えばフランスのJean Starobinski, *Le ragioni del testo*, Bruno Mondadori, Milano 2003やイタリアのMario Lavagetto, *Eutanasia della critica*, Einaudi, Torino 2005などが話題になっている。
- ⑥ラウラ・モレッティ、「マリオ・マレガ文庫所蔵黒本・青本『〔ふちともんどう〕』」（『藤戸問答』）について一複製・翻刻・イタリア語訳・解釈『国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信：2004年度研究成果報告書』（研究代表者安永尚志）、国文学研究資料館、2005年3月、1-35頁。
- ⑦国文学研究資料館文献資料部編、「サレジオ大学マリオ・マレガ文庫所蔵日本書籍目録」、「調査研究報告」第23号、2002年、1-74頁。
- ⑧筆者がこの問題点を利用者側から考えているが、図書館情報学の観点からだと、山中秀夫氏の研究が詳しく、「和古書総合目録構築のための基本的問題に関する考察」、「日本図書館情報学会誌」、Vol.51, No.2, June 2005、62-74頁などを参照されたい。
- ⑨Laura Moretti, “Il manoscritto nell’era della stampa: riflessioni sui testi letterari di periodo Edo (1600-1867)”（「版本時代における写本—近世文学の文学作品を中心に」）、*Scritture e Codici nelle Culture dell’Asia. Prospettive di Studio*, Cafoscarina, Venezia, 発行中。
- ⑩Haruo Shirane (edited by), *Early modern Japanese literature: an anthology, 1600-1900*, Columbia University Press, New York 2002.
- ⑪鈴木健一、「日本の近世に新しい風を通す8のテーマ」、「国文学」、2001年6月、114-121頁。
- ⑫詳細は⑬に挙げる博士論文を参照。
- ⑬博士論文“The Literary Fortune of a Wandering Quack Doctor of the Edo Period. Textual and Intertextual Dynamics in *Chikusai* and *chikusaimono*”（近世の藪医者の文学的な幸運—『竹斎』と竹斎物）。

- ⑭深沢秋男、「仮名草子の範囲と分類」、『早稲田大学蔵資料影印叢書』、月報43、1994年 9月。
- ⑮中尾佐助、『分類の発想—思考のルールをつくる』、朝日新聞社、1990年。
- ⑯ジャンルを横断的に考えるのは文学ジャンルの理論の上でも（例えばSportelli Annamaria, *Generi letterari -ibridismo e contaminazione*, Editori Laterza, 2001など）国文学の世界にも（長島弘明、延広真治、対談「近世小説—ジャンル意識を超えて」、『国文学』2005年 6月第50巻 6号、6-23頁など）重視されるようになった。筆者が2005年のEJJSで行った“Hybrid prose of the kinsei literature. Multiple contents, pluri-modal prose and poli-functional books”という発表より近世初期の散文文学作品において以上の検討を始めた。

* 討議要旨

津田真弓氏から、テキストデータをつけたPDFを、学会もしくは研究者個人単位で、論文を発表するたびにどこかに集積していくということを考えてもよいのではないか、という提案があり、発表者は、そのような方向に進めばよいと思う、と答えた。

山下則子氏は、全般に外国人研究者の書誌研究に対する反応は鈍いが、環境的にも難しいのではないか、との意見があり、発表者からは、時々鈍い反応もあるかもしれないが、Peter Kornicki先生のような研究者の立派な研究成果を忘れてはいけない。勿論、国文学研究資料館がもっと外国の研究者にアピールし、話し合い連携を進めて行けば海外でも書誌的研究の推進は望めるのではないか、国文学研究資料館の海外調査でもっと現地の外国人研究者との協力関係の発展を考えておけば、調査も進捗するのではないか、との回答があった。

ロバート・キャンベル氏から、同じ外国人研究者として、発表者の提案に賛成する旨の発言があり、発表者からは、自分の世代の研究者育成のためにも、環境の整備を切望する旨の回答があった。